

1924年(大正13年)[20歳]

「辰雄日誌1924」No. 5 (5)

—— 1924年12月1～31日 ——

小池辰雄

○1924年12月1日(月)

晴。内村先生の御講演の夢を見る。二晩、講演がつづいたからであろう。近頃は唯心論になりたい位、霊と云うもの、心と云うものの偉大さを感じる。いよいよ、12月、最終の月(1924年の)が来た。感謝と願いと山よりも高く海よりも深い程、多くある。何からどうしていいんだかわからない。試験が近づいて来た。間に合わぬ。あわてるな。運命はかかる2学期にある。青丸をとらなければよいとする。身体はやつぱり大切だから。

○1924年12月2日(火)

晴。今朝は非常に寒かった。しかし実によき天気だった。昼ごろは暖かった。静かな晩だ。宣ちゃんとか向かい合いで勉強をする。誰もいない。夕方、理髪屋へ行つて二分刈りをした。兄上様からパンを、姉上様からベーカリーのお菓子を、母上様からは愛の結晶なる襟巻を小包で送つて下さった。手づから編まれた毛糸の実にあたたかい襟巻である。感謝の至り、言語に絶するものがある。

ああ、我、罪人なる哉。言い難き深刻の苦しみ悔いは多し。汝は、繰返し言う。汝の罪は大なり。汝の浪費、濫費、徒費、損失は大なり。金銭上にも、精神上にも、知識上にも、身体上にも。しかして総てにまさる恵は来れり。主によりて来れり。十字架によりて来れり。励めよ、覚めよ、起てよ。時はおそろからざるなり。我が健康も、勇気も、愛も、智も、すべて十字架によりて得らる。健康、薬石より来らず。愛も智も勇もすべて主の十字架を仰ぎ瞻ることによりて。アーメン。

○1924年12月3日(水)

晴。勉強にスピードがないので悲観する。西洋史はマイヤーの Ancient History [古代史] 200頁、なかなかある。

○1924年12月4日(木)

晴。経験するはよいことである。しかし同じ愚を再びするは、誠につまらなき、愚かなことである。経験も故に種類がある。よき経験をなせである。而して、汝の理想へと進ま



ざるべからずである。

○1924年12月5日(金)

晴。この頃は床に就くのが11時頃となった。どうも已むを得ない様である。焼芋とは実に美味しいものである。湯気の高や高やしているところは何ともいえない味を有す。天然の甘味は到底人工の及ぶところにあらずである。

この頃、僕を馬鹿にする奴がある。僕にされる僕に罪があるとは思ったが、やっぱり少しは癪にさわる。それをもう一度思いなおして、否、罪我に在りと思つたときに、言われざる平安と愛とが臨んで来た。そして、僕は全く別な僕となって、その人に対する得て、敵を愛することが出来る。有難き神の力とつくづく感じた。

○1924年12月6日(土)

晴。今日は冬らしく実に寒い。3時頃、また焼芋を食べた。間食を止められているのに食べた。それはよくないことであつた。うまかつたが。己れの約束にそむいたのである。赦し給え、神よ。罪人は神を仰ぐ。

よわきものよ われにすべてまかせよやと 主はのたもう。

主によりてあがなわる 我が身の幸は みな主にあり。アーメン。

○1924年12月7日(日)

雨。起きがけに雨の音を聞く。如何にも静かなものである。終日家に居る。久しぶりで矢作義之君の所へ、クリスマス絵葉書で音信をした。赤倉の北村忠一君のところへも音信した。レン子様にも絵葉書をあげた。サンタクロースが林の中を過ぎ行くところの。武田の叔母様、吉原の叔母様にも上げた。

隣の女将さんが来て丁度僕が一人で居たのでちょっと話をした。彼女は肉も魚もあんまり食べないそうである。卵さえ好きでない様であり、何がすきかと云うと塩の辛いものであると。梅干が殊に好きだそうで、梅干と御飯がありさえすれば足るそうである。殊に菓子類ときたら断じてくわぬとのこと。あんの菓子なんか一つでも食べると胸が悪くて、数日たまらないとのこと。また、酒のつよいものなども。彼女は塩で生きている。米で生きている。味噌で生きている。野菜類で生きている。故に太っている。生き生きしている。病をしたことがないそうである。御馳走は禁物、お菓子は禁物だと言っている。全く然りだと思った。

「東京の人はお菓子を食べたり、御馳走を食べたりするから、身体が弱いんでしょ
う」

と云っている。「全く然りだ」と答えた。僕自身が充分に彼女の言を味わい、履行する必要



ある人であるを思い、いいことを教えられたと思った。粗食、間食忌避主義がよい。

一年を顧みる。正月を思う。4月を思う。夏を思う。しかして今日を思う。罪あり、過ちあり、失敗あり、怠惰あり、一つとしてよきはなし。汝はまた罪の罪なり一年をおくりたり。然れども然れども徒に悲しむ勿れ。1923年春、蒔かれし種は空しく枯れはつるものにあらず。それは、石の上ならず、沙の上ならず、生命の土の上に蒔かれたるなり。今は未だ貧弱にして弱くある如し。人も然かく見る。十字架も爾かく思う。然れども希望の最大なるここに在り。風雨の加わるに従いて、この貧弱の木は生命の土の上にあるが故に、やや強く太く生い立ち行く。「彼」なるが故に感謝せよ。恩恵に浴せよ。アーメン。

○1924年12月8日(月)

晴。ずいぶん寒くなって来た。試験勉強に実が入ってきた。12時までやる。だべるのも休息としてよい。同じだべるのも、互いに知識を交換したり、感想をのべあったり、議論を闘わしたりするのはこれまた、よいことである。つまらぬ新聞の記事を見たり、活動を見たりするよりよいことがある。

○1924年12月9日(火)

雨。非常に寒い。グンデルト先生の時間は面白い。今日はミケランジェロの名画を見せ戴いた。あの本がとても欲しくなった。創世記第1章、第2章の辺を描いた壁画である。その生命の溢れていること、力のあること、到底こんな画を日本に見ることが出来ぬ。偉大なる芸術である。

○1924年12月10日(水)

晴。赤倉の北村忠一君からのこの間の手紙に、

セイタカのつぼノ妙高山、やっぱり灰色 ドンヨリシヨ

海のムカウの佐渡が島、やっぱり灰色 ドンヨリシヨ

大雪小雪で日がくれて

カチメの母ちゃん帰る道、やっぱり灰色 ドンヨリシヨ。 孤漂

と云うのがおわりに書いてあった。なかなかうまい。天真爛漫である。赤倉の冬を想像して非常になつかしくなった。

先入主と云うことのなかなか、おそるべきことを感ず。或は害をなすことあり、益をなすことあり。而して多くの実際問題に会して、害や悪影響を及ぼす場合多きを見る。試験を受けるには、やはり1ヶ月位前から着々とやって置くが得策である。今度は、そんなにくるしくもない様であるが、相当がんばらざるべからざる様になってしまった。共に生活しているとやっぱり妨げが多くて僕の様なたださえ、予定を履行し得ぬ人間には困難な



こととなる。あれこれと考えるがやはり、信仰の確実なる生活をなすが第一である。言うなかれ、行うべし。カーライルは言った、

「汝は25才まで樽をかぶつて居ろ」

と。ちょこちょこ言わずに、黙然たれ、力ある沈黙をなせ。

毎日毎日、忘れてならぬことは之である。

汝の母上は肉眼の失明者にて在ます。

汝の長兄は犠牲の血を汝のために流し給えり。

この神の御言より深刻に僕の胸を刺すものはないのである。これ、僕が肉に死して霊に生きんためなり。我が神エホバと主イエス・キリストに感謝し奉り、この世の旅路を終るまでこの深刻なる恩寵のために戦い、恩寵のために戦い、恩寵のために我が身を献げんものなり。神よ、主よ、この願いを享け入れ給え、果たさしめ給え。アーメン。1924.12.10。

○1924年12月11日 (木)

晴。我を嘲笑して偽善者と云うものあり。それは冗談であるにせよ、我は誠にその語を快しとせず、彼の語の全然、冗談なるを聞いて、よしとは思ったが、とにかくこの語を放たれたる自分は、問題は別として、考えた。そしてやっぱり信仰の足りないのを思った、泣きたくなった。何故、不徹底なるつまらぬ人間の道へ僕の足は墮せんとするのか。つらつら我が全生涯 (今までの) をかえりみるに、罪悪の数々はこれ、あわれむべき我が悪性のあらわれである。その悪性は如何にせば我が身体よりあとを絶たんか。ただ己れを棄つるにあり。絶対の神への献身にあり。

○1924年12月12日 (金)

晴。今日は山本の隆坊のお誕生日である。小さい彼を思つて、会いたくなった。

寮に腸チフス患者いで、今日は消毒で休校であった。夕方、この頃あんまり運動をしなから、宣ちゃんとキャッチボールをした。

○1924年12月13日 (土)

晴。「我は復生〔復活〕なり生命なり」(ヨハネ)

○1924年12月14日 (日)

晴。ラザロの復生。

○1924年12月15日 (月)

晴。エホバよ、汝は永遠に在ます。



○1924年12月16日(火)

晴。

○1924年12月17日(水)

晴。試験が近づいてきた。ガンバル。

○1924年12月18日(木)

晴。近頃、乾燥しすぎる。学校に問題が起きた。寮に腸チフス患者が3人出て、1人は死亡したとのことである。この間から問題となって徹底していなかったため、今日、爆発した。学生大会が開かれた。すこし風邪がみで家に静かにしていた。

今日ねていて感じた。宇宙は不思議極まるものである。而して神様はこの上もなく有難いものである。僕は何の心配もない。すべてエホバ神によりて安し。実に万物之、不思議である。母上様から御手紙を戴いた。為替も戴いた。

兄上、今正に陸軍大学の試験中である。願わくはよく戦われんことを。

○1924年12月19日(金)

晴。チフス問題で、学校は一さわざである。夕方、遂に第2学期試験、延期と決定した。

○1924年12月20日(土)

晴。支度を整えて12時の汽車で帰った。同級生5、6名と共に。家の人は皆、あまりに突然なので驚いていた。こんどの事件はかなり学校に失態があったのである。伝染病が1人でも共同生活をしている寮宿舎に発したならば、もっと慎重の策をとるべきであり、そのため蔓延がかなりの程度になって、ことここに至ったのである。こんどの休校、延期は当然の成行きであると思う。試験なしで帰って来たことは一面にはあまり気持のさっぱりすることではないが、また一面には僕にとって有難いことである。それは消耗せんとしていた身体が消耗せずしてすんだことである。

○1924年12月21日(日)

晴。晴天つづきである。兄上様、陸軍大学の試答(口答)で大変お忙しい。随分、奇抜な試験である。こんな様な試験なるものを聞いたことがない。人を馬鹿にしている様な、議論でもあるような、とにかく天下一品なものである。

○1924年12月22日(月)

晴。銀座の方へ行ってみた。教文館へ行った。“Grace Abounding” John Bunyan's



Autobiography「恩寵豊かなる」ジョン・バンヤンの自叙伝」が来ていたのには全く嬉しかった。早速買った。今日は1924年の兄上の最終の御命日である。よき日によき本を求めた。

○1924年12月23日(火)

晴。藤井先生と高島のおば様のお家とへ上った。かよ子様、効さん、厳さんにお会いした。訪れて門を開けて待っているとき、伯母様が出ていらつしやりそうな気がした。全くまだ夢の様である。お家のなかは何となく淋しい。お写真をいただいた。

藤井先生は相変わらず、お書斎で本に埋まってなにかお研究の最中であつた。実に別天地である。その室内は天国の気に満ちている如く感ぜられ、知らず知らずに我が霊も清めらるるのであつた。また、その読書の非凡なるを拝しては、自分も此くの如くと願わざるを得なかつた。今の自分の不勤勉を省みて、^{ざんかん}慙汗背を^{うるお}濡すのであつた。

色々お話して、僕の「努めざるべかず」「汝の使命は大なり」の感を強固にせられ、実に有難き時を戴いた。グンデルト先生の話も出た。藤井先生は一高時代に習われたとの事。その語学の天才を(それは努力によって勤勉によって得られたのであろう)激称せられ、

「あの先生に習っているのなら外のことを犠牲にしてまでもしつかり勉強せよ。高

等学校時代に語学の力を養成することは一生のため実に肝腎なことである」

と云われた。益々、平常の不勉強を^は慙じた。グンデルト先生の熱心をよく知って居られるが、彼の純キリスト教をやや遠ざかられたのを責めず、彼の学問に対する熱心をほめて居られた。僕の、かかる先生についている幸をよろこんでくださった。そして、ヒルティーのエッセイをやっていることを聞かれて、是また実に良書であることを説かれ、益々勉むべきことを示された。偉大なる人格に接して、感謝に溢れて帰つて来た。これもまた亡兄のお蔭である。汝は誠に恵まれたるもの、また、重大の使命を有せるもの。神によりて確く。アーメン。『基督の復活』25部、今日くださった。

○1924年12月24日(水)

晴。武田のお家へ行った。お昼をはさんで。叔父、叔母様は大層僕の元気なことをよろこんでくださった。そして今日はよいお話をして、僕も大層嬉しかった。宣ちゃんは今晩スキーに立った。五色へ。武田から直接に山本へ行った。富美ちゃんに風船、義雄さん、隆さんに風を買って行つて上げた。僕を待ちあぐんでいたと見えて、遠くから僕の姿を見つけて、「小ちゃい叔父さん叔父さん」と云つて雀躍していた。日がくれかかっていたので今日は風を揚げてやるわけに行かなかつた。義雄さんは字が読めるようになって居り、隆さんものわかりがよくなり、富美ちゃんもかなりわかるようになった。4ヶ月のうちに皆のおりこうさんになっているのに驚いた。兄さん、姉さん、今晩、クリスマスのおよばれで、お



留守居に行つて上げたのである。6時から10時まで、小さい人達3人と一緒に無邪気に遊んだが、10時頃には皆眠つてしまった。子供は眠くなったら一瞬の中、魔睡にでもかけられた様にとろとろと身体までぐにやぐにやである。昼間は一瞬もじつとしていないから全く疲れるのだろう。

○1924年12月25日(木)

晴。クリスマス。朝、風を揚げてやった。随分高く揚がった。大喜びだった。流星の質問をうけて、弱った。そのなかなか条理だっているのと科学的なのに驚き且つうれしかった。10時頃お暇した。姉様、お元気でうれしかった。兄上様からお歳暮をいただいた。丸善へ行った。ミケランジェロの絵画、彫刻の写真本(独逸製)を買った。グンデルト先生が、かかる書はいつまで見ても飽きなく、また実に貴いものであるから買つては、と言われたので、僕もまた是非欲しいと思つていたのである。バイブルを題とする彼の生命ある力ある画を見ては、その偉大なる芸術からもまた生命の泉をそそがれるのである。

晩、平口様と母上様と3人で駒込基督会のクリスマス祝会に列した。讃美歌95、聖書朗読、祈り、祝辞、讃美歌57、……日曜学校の生徒の色々な祝賀の催しがあった。可愛らしい子供の愛のあふれた所作を見て全く何とも云えない楽園をそこに見た。武田の叔母様も来られたらと思つた。「星影におう」「槍と水瓶」「祭司長の僕マルコス」「星の世界」「あれあれあそこに」「文化村」いずれも可愛らしかった。文化村は劇に近いものでなかなか上手でまたすじも面白かった。時間があまりおそくなるので9時に教会を去った。青木へ寄つた。約1時間居て、帰った。千鶴代さんがクリスマスケーキを作つてくださった。

兄上様と母上様と3人でお話をして寝たのは12時すぎだった。

○1924年12月26日(金)

晴後雨。空が冬めいている。久しぶりのどんよりした空模様である。午後、荒川様へお礼に行った。胃下垂がなおつたとのこと、有難くあつた。節制を確く申しわたされた。25才までに本当に基礎を作れば身体は作りかえられるとのこと。「急がず休まずに少しずつ」と思つて、確く決心した。

○1924年12月27日(土)

曇、雨、晴。雨が昨夜降つたため、悪路泥濘ぬかるみと化した。厄介なのは東京の道である。母上をお伴れして、山本へ行った。どうしても行かねばならぬので。兄上と姉上が媒酌人で大野さんという姉上の親友の婚礼に行かれた。留守を仰せつかったのである。小さい3人を相手にまた、無邪気に暮らしてしまった。コマを買つて行つてやったら、喜んで一日あそんでいた。お風呂にも入れてやった。9時に兄姉は帰つて来られた。それから母上と悪

路を冒して帰った。10時に着いた。全く今日の道には閉口した。

偽善者よ、意志薄弱の虫けらよ、浮薄の者よ、婪貪飽くなきものよ、不幸ものよ、怠惰者よ、汝はあらゆる悪名を受くるに価値あるものなり。罪人の罪人なり。最もあわれむべき人の首領なり。天の父、キリスト、父母兄弟、叔父叔母、従兄弟姉、知れる総ての人々、知らざる人々にも、汝は汝の首を垂れて、罪の赦しをなせよ。

知らず、汝の罪の如何ほど大なるかを。その浪費せし、時、金、その及ぼせし迷惑、罪惡、不敬、不遜。然れども汝の罪はゆるされたり。今は、クリスマスの時なり。感謝せよ。而して心を確せよ。

逝きし兄上様、高島のまま様、願わくはその血を我が血の血となさしめ給え。願わくは純正なる基督者とならしめ給え。その十字架による生涯を送らしめ給え。我がことは何よりもかによりも、天国を地上に望みつつ歩むにあり。天国を實在しつこの旅路を行くにあり。願わくは願わくは、この罪人の切なる願いを聴き入れ給いて、本当に本当に一変した辰雄を創造り出し給え。「急がずに休まずに少しずつ堅実に」、願わくは。

1924年は行かんとす。1925年は来らんとす。22才の春は来たらんとす。願わくは1923年播かれし種の益々よく成長せんことを。神よ、今日感謝することあり。兄上様を陸軍大学に入れ給いしことと、その兄上の努力を通して余の兄上の如何に模範とすべきかを知らしめ給いしことなり。神は兄上をあらゆる苦境に置き給いて、その堅忍と努力とを試み給えり。しかして兄上は喜ばしくも、その御試みを首尾よく受けて御心になう様に貫き給えり。而して栄冠を神より授けられたり。願わくは更に更に御力を注ぎ給え。最後にまた、我が基督者たらんことを。飽くまでも真誠なる熱烈なる基督者たらしめ給え。アーメン。

○1924年12月28日(日)

晴。起床8時。母上様は教会へ行かれた。兄上は昨夜、荷物を纏めに宇都宮へ帰られた。姉上は今日所用ありて学校へ行かれた。午後零時半、僕もまた出かけた。2時までには時間があるので頭髮を刈った。2時20分前、目指すところへ来た。はじめどこが内村先生の家だかわからなかった。一寸、横道へ入って見たら、門があつて、内村という標札がかつていた。是ぞ、昨春以来、敬愛措く能わざる内村鑑三先生のお宅かと知ったときに、僕の胸はたかなりした。さて、どれが「今井館」でどこから入ってよいのかわからないので、暫し、うろうろと徘徊して覗^{うかが}っていたが、どうも悪漢みたいで良心もあまりよい感じがしないので、やめて、やや遠のいて、人の来るを待っていた。2時15分前になると一人、また一人と、集い来たと見ると、門札のない新しい門から入って行く。あの人達は今日のお集まりに来た人達だなあと僕は思つて、そこで入るべき口も知った。彼等は黒い風呂敷を手に入れている。バイブルと讚美歌が包まれているのである。そこで僕も入って行つた。僕はかねて向



山堂の人から会員証を借りていたのでそれを出した。そして、自分の会員でない事も話した。すると、一寸待つてくさいと言つて奥へ行つた。僕は、つきかえられるかと、やや恐れていたが、やがて「ようございます」とのことと安心した。今井館は収容人員150名位であるらしい。正面に「幼きキリスト」の画像が掲られてあり、上の壁に「最後の晩餐の図」、その他2、3のキリストの図、「Christ in the Temple」「神殿の中のキリスト」「Christ in Prayer」「祈りの中のキリスト」があつた。また、ルツ子嬢の像も掲つていた。中央に大テールあり、それを囲んで三方に椅子が幾重にも並べられている。だんだん会衆が入つて来た。「クリスマスツリー」とほかに、心ばかりの装飾とがほどこしてあるばかりである。ヴィクターレコードの音楽を時の到るまでやつていた。讃美歌であるらしい。やがて、どなたであるか、司会者が立たれて会は開かれた。今日のは、青年学生、労働者のクリスマスなのである。讃美歌を歌い、祈祷あり、やがて自己紹介を片っ端からやることになった。これは大変と思つたが、よくよく思いなおしてみると、こんなありがたいことはないのであつた。しんみりしたクリスマスである。内村先生を残して畔上先生、塚本先生も皆された。信仰のことに関してや、色々と感想が出た。熱心な先生の徒には感ずべき人々が居る。終りに近づいて僕も立つて一言せざるべからざることになった。僕は、「如何にして基督者になつたか」その経路を簡単に述べた。言わんと欲することの十分言えざりしを残念に思つたが、しかし有難きことであつた。あわせて、今日、このお集まりに列せさせていただいたことを深く深く感謝した。

そもそも今日この会に出る様になつた動機を考えてみると実に奇である。25日に向山堂へ、1925年のカレンダーを買いに行つた。と一寸、内村先生の話が出て、彼から会員証を借り受けることを約束したのである。と云うのは彼は28日は丁度用があつて行けないから、と云うのである。昨年春、大手町で先生の講演を拝聴して以来、先生のお顔を見ざるに久しく、先生のお講演を聴かざること久しであつたため、研究誌上では拝見しているが、直接に接することなく、是非と思つていたところだったので誠に嬉しかったのである。折も折、1924年のクリスマス祝賀の会に出席し得たとは何たる幸ぞ。恵まれたことぞ。

最後に内村先生のお話がある。先生をこんな目近く、また打ちとけて親しく話されるのをうかがつたことがないのである。先生は齒の治療ようやく終えられたところと見え、はなはなお話しなさににくい様である。総入歯と承る。先生、来年は65才とられる。先生が最も今日強く言われたことは、「Boys, be ambitious!」「少年よ、大志を抱け!」と云うクラーク恩人の言を繰り返されたことと「Stand up for Jesus」「イエスのため起つ」と「Stand up for Japan」「日本のため起つ」「愛国心」であつた。現代の日本を如何せん。宗教に基礎をおかずば、しかして基督教を以てせざれば。これが最大の急務である。現代の青年を見よ。現代の教育を見よ。現今の日本の経済状態を見よ。日本は50年を出でずして(このまま進み



行かば) 亡びんと、先生は絶叫される。憂国の余り、愛国の余り、先生は切々と解かれた。このときにあたつて、立たざるべからざるは我々青年である。基督者の覚悟、責任は大である。我々は戦わんがために選ばれ、遣わされたるものである。神の真理と十字架の信仰とに確く立ちて我々基督者は世と戦い、世に光を与え、世を福音によつて救わざるべからずである。

内村先生の札幌農学校時代から今日に至るその苦闘、奮戦、堅忍を打ち開けてはなされた。「不敬事件」をさへその真相を語られた。実に実に先生の偉大とそれによつて受ける我々の幸福、感謝を深甚感ぜざるはなかった。而して先生は言われる。内村が偉いのではない。今の人間が意気地がないのであると。誠に然りである。自分自身が最も然りとするものである。誠に内村の弟子である以上、内村と苦しみを共にし、また栄光も共にすべきである。誠に、我々は先生の講演を感謝して聴くのみならず、実に先生の道を踏んで十字架のイエスのために立たざるべからずである。現世の迷に迷わされざらん様、常に主の道を歩まざるべからずである。

先生の熱烈な伝道も若し、我々、真剣に従わずんば水泡とならんのみ。先生のみ偉くして、あとは雀の死ぬ様に消えゆくものである、そんなことで日本が救われようか。誠に農学校でその昔誓ひし30名が皆、基督教伝道に熱心ならば、今の日本は更に幸福なりしならん。当時最年少者の先生のみ孤軍奮闘となつたのである。先生なかりせば、また今の日本の純正な基督者は誠になりしならんとさえ思われる。選ばれた人よ、内村先生。而して選ばれた人よ、柏木に集まる人よ、及び熱心なる基督者らよ。我等は自己を離れて、棄てて、国民国家のために基督教をひろめざるべからず。愛国救国は即ち、基督教伝道に依らざるべからず。日本の100円は米国の38ドルであると。しかして来月の末までには35ドルをも下らんと先生は預言される。以て、日本の経済の危機、国家の危機を叫ばれる。かつて国賊とまで言われた先生は今もなお、最も切なる、真正なる愛国者なのである。強く愛するものは強く悪む(不正、不善を)。如何に誤解さるるとも、神の真理の上に立ちては、何のおそるることかあらん。遂には勝利である。我々、基督者は何もおそることない。心を強うして可なり。これは真の真なることである。戦わんかな時機至る、時機至る。キリストのため、国のため、正義のため。我々はわが国人の眠れる墮落せる霊を醒めさせ、向上せしめんために戦わざるべからずである。国人をにくむは、国人を愛するが故にである。国人の悪霊と戦つてこれに勝てば、世界と戦うことが出来る。

ああ、キリストの福音を伝えんかな。

内村先生は今晚、切に切にこのことを言われ、我々、先生の愛敬者にその責任の重大なることを言われ、且つ心から「立てよ」と願われるのである。誰か先生のために、キリストのために、熱涙に溢れて「立たん」と決心せざるものがある。僕も拳を固め、眼に涙を浮かべて先生を凝視^{みつ}めて「立ちます」と凛然と口を締めて言つたものである。実に実に、



感謝なる日として此の如きはなかった。

1923年の春、蒔かれし種は、次第次第に生い立ち行く。神よ、感謝の至りなり。

1924年のクリスマス、今日この日を期して、我は一段と主のものとなりたるをおぼゆ。

何より貴き宝とて、十字架の福音に勝るものなし。主よ、1924年のクリスマス永遠におぼえしめ給え。1925年を更に更に、主のために用い給え。アーメン。

帰りに武田の叔母様のお家へ言った。叔母様に今日のこのことをお話しした。叔母様のおよろこびは一方ならぬものであった。2時間半ほどしんみりとおはなした。秀^{ひで}に、マタイ伝と角筭パンフレット4冊を持って行つてやつた。彼女は近頃、基督の福音を求めている。彼女の信仰に入らんことを祈る。叔母様、お歳暮を下さった。

○1924年12月29日(月)

曇。暖かいと云いたい位。夜、斎藤さんへ遊びに行き、大変太ったと喜ばれた。『東宮御外遊記』をお歳暮に戴いた。昼間はお寺へお使いに行つた。帰りに、丸善(神田)でウィリアム・クーパーの詩集を求めた。1924年のクリスマスの記念に。内村先生も「1924年のクリスマス」の如何に感謝なりしかを言われた。兄上様を思い出す。ああ、兄上よ、兄上よ、宿り給え、辰雄に。我は立たん兄の跡に。

○1924年12月30日(火)

曇。今日はお歳暮あるきをした。帰京以来一日として家で終日暮らした日はない。母の御用か自分の用で出掛けている。お正月のおかざりものを買いに行つた。28日には、先生から今日の会集へ、ドーナツツや羊羹や栗マンジューやみかんなどをくださった。先生からであるので、とりわけ美味しかった。先生の熱烈なる信仰と不断的努力とがそこにこもつていて、それが僕の中に受け入れられた様であった。半分、持つて帰り、兄上の霊前におそなえし、且つ母上にもさし上げた。献金50銭をした。

今日、お湯屋で目方を測つたら12貫(45kg)あった。遂に12貫になった。有難いこと有難いこと、実に有難くある。僕はもう普通の健康体である。もう身体のことを気にかけることはない。それだけの精力を信仰と学問に向けてやろう。ありがたしありがたし。

主よ、主よ、選ばれたり、我は。

願わくは、信仰を堅うせしめ給え。

願わくは、信仰の実行の勇者となさしめ給え。

願わくは、愛の業をなさしめ給え。

願わくは、我が小さき、罪と、無能を自身くよくよとかえりみることなく、常に主の十字架を迎え、仰ぎ瞻てその血潮に浴せしめ、力を注ぎ込み給え。主の業に忠実なる僕となさしめ給え。アーメン。



○1924年12月31日(水)

大正13年の最後の日が来た。そして去らんとしている。今日もまたいつもの様にすぎた。虚栄の市へも行つて来た。そして自分も虚栄に浸った。虚にして空なるものを追った。そして、浮薄と無思慮は信仰のなき心から出て、遠慮なくそとにあらわれた。悪よ亡びよ。虚偽よ逝けよ。不信よ去れ。すべてのよきものは信仰より来る。すべての恵はただ信より起こる。願わくは父なる神よ、来り給え。救い給え。御光をあらわし給え。希望と力の年を下し給え。神よ、然れども今年もまた誠に感謝の年なりき。1922年、1923年、1924年、クリスマスは3回我、之を迎えたり。1922年の暮より1924年の暮に至る正に2年を経た。未だ未だである。兄上の陸軍大学に入られたことは母上を如何ほど安神せしめたことであろう。聖書へ、聖書へ、基督教へ、基督教へ。

